

農業と科学

CHISSO-ASAHI FERTILIZER CO. LTD

1985
10

農産物輸入の動向

農林水産大臣官房調査課

田村修一

〈農産物輸入の伸びは鈍化〉

我が国の農産物輸入は、食料消費構造の変化を伴う需要の増大から増加傾向で推移している。これを、農林水産省「農林水産物輸出入の数量・価格指数」によりみると、我が国は48年まで経済が好調であったこともあり、農産物輸入数量は、年率で、30～40年間は9.9%増、40～48年間は10.2%増と着実な増加を続けた。しかし、48～54年間は輸入価格の高騰に加え、インフレと不況による食料需要の減退等から年率2.3%増と伸びは大きく鈍化し、54～59年間においても、食料消費の伸び悩み等を反映し、1.9%増と引き続き低い伸びにとどまった。

近年の農産物輸入の動向を年をおってみると、48年の輸入数量指数は過去の増加基調が続き、前年比14.8%増と大きく増加し、また、輸入金額も前年の1.6倍となり、世界貿易額のほぼ1割余を占めるに至った。しかし、49年に入ると、我が国も欧米諸国と同様にインフレと不況に見舞われ食料需要が減退したことに加え、農産物輸入価格も著しく上昇したため、多くの品目が減少に転じ、輸入数量は8.1%減と減少に転じた。50年にも、畜産生産活動の遅れ等から飼料穀物の輸入が減少したこともあって、全体としての農産物輸入は6.4%減と前年に引き続き減少した。

51年に入ると、畜産生産活動の本格的な回復を反映して飼料穀物の輸入が増加し、畜産は生産活動の回復が生産増加をもたらすまでに時間を要することもあって国内の枝肉生産量が前年を下回ったため食肉の輸入が急増した。これに加えて需要の回復に伴う大豆輸入の増加、前年に引き続きコーヒー豆の輸入増等もあって全体として

の農産物輸入は13.3%の増加となった。52年は、食料消費の伸びの鈍化や国内畜産物生産の増加によって前年比4.1%増と伸びが鈍り、53年も前年と同様4.1%増となった。54年には、飼料穀物、牛肉等が必要増大によって引き続き輸入増加となったことや、前年に落ち込んだ粗糖及びコーヒー豆の輸入が回復したこと等により、全体では8.5%増とやや伸びを高めた。

55年に入ると、農産物需要の停滞や輸入価格の高騰などから多くの品目で減少となり、全体では3.8%減と50年以来の減少となった。しかし、56年には、食肉、生鮮果実、嗜好食品等の増加から1.8%増とわずかながらも増加に転じ、57年も輸入価格が総じて下落したことや前年大きく減少した砂糖類が大幅に増加したこともあって2.7%増と引き続き増加し、これまでの最高であった54年の水準を上回った。

58年は、麦類、食肉類が増加したほか大豆も前年に引き続き増加したことから全体では4.2%増となり、59年

本号の内容

§ 農産物輸入の動向……………(1)

農林水産大臣官房調査課 田村修一

§ キュウリの台木としてのアレチウリの特性(2)…(3)

千葉県農業試験場
野菜研究室長 土岐知久

も、飼料穀物、生鮮果実、食肉類等の増加から4.9%の増加となった。

＜砂糖類、蚕糸の輸入は減少＞

主な品目別に輸入の動向をみると、

穀物その調整品については、小麦製品の需要増加や畜産生産の増加に対応した飼料穀物需要の増加等から、年率で、30～40年間は6.2%増、40～48年間は6.7%増と増加を続け、48～54年間は4.5%増と伸びはやや鈍化したものの堅調な伸びを続けた。しかし、55、56年と畜産生産の停滞を反映して飼料穀物輸入が減少したことから伸び悩み、その後、畜産生産の回復を反映して輸入は増加したものの、54～59年間の輸入は年率1.8%増と伸びは大きく鈍化した。

果実その調整品については、食生活の向上、多様化等を背景に輸入は大きな増加を続けてきたが、近年その伸びは大きく鈍化している。30～40年間は、バナナ、パイナップルの輸入自由化などから年率で31.5%増と著しい増加を示し、40～48年間も、グレープフルーツの輸入自由化もあって年率15.6%増と大幅な増加を続けた。しかし、48年以降、輸入果実の大宗を占めるバナナの需要が減退したことなどから、48～54年間では年率4.3%増と伸びが大きく鈍化し、54～59年間においても、オレンジ及びオレンジ果汁の輸入枠の拡大はあったものの、バナナの需要減退等を反映して年率で2.6%増と低い伸びにとどまっている。なお、59年の輸入については、オレンジの輸入枠の拡大に加え、前年輸入先国の干ばつの影響から大きく減少したバナナ、パイナップルが生産の回復により増加したこともあって9.4%増と比較的大きな増加となった。

野菜その調整品については、年による増減はあるものの順調な増加を続けている。輸入量は、年率で、30～40年間は8.6%増、40～48年間11.4%増、48～54年間は8.6%増となっており、54～59年間においても、他の品目の輸入の伸びが大きく鈍化しているなかで8.0%増と比較的高い増加を続けている。

砂糖類については、年率で、30～40年間は7.0%増、40～48年間は3.3%増と増加を続けたが、その後、甘味ばなれ等を背景に需要が減退したこともあって49年をピークに減少傾向となり、48～54年間は0.3%減、54～59年間は5.6%減となった。

植物油・油脂原料・油脂については、その大宗を占める大豆が、大豆油や飼料用としての大豆かすの需要の増大から増加し、年率で、30～40年間は8.6%増、40～48年間は9.9%増と順調な伸びを続けたが、その後、食用油の需要の伸び悩みなどから伸びが鈍化し、48年以降は年率1.7%の増加にとどまっている。58年は、最大の輸入

先国であるアメリカが熱波の影響を受け大減産となったことから、先高を見込んだ仮需の発生により12.0%増となったが、59年はその反動もあって6.6%減となった。

畜産品については、48年にかけては、畜産物の需要の増加等を背景に、年率15%前後の大幅な増加を続けたが、その後、国内生産の増加や需要の伸びの鈍化等から48～54年間は1.8%増、54～59年間では2.2%増と伸びは大きく鈍化している。

蚕糸については、高度経済成長下において、高級化志向の強まりによる需要の増加から、年率で、30～40年間は16.9%増、40～48年間では37.1%増と著しい増加を示した。しかし、生活様式の変化等を背景として生糸消費が47年をピークに減少に転じたことから、輸入量も年率で、48～54年間は8.5%減、54～59年間は10.8%減と大きな減少が続いている。

以上のように、全体的に農産物輸入の伸びが鈍化するなかで、穀物その調整品のなかではマカロニ、スパゲッティ等がイタリア、アメリカ等から、野菜その調整品のなかではこなす、らっきょう等のつけ物材料や冷凍野菜が東南アジア等からそれぞれ輸入が増加している。このように、近年の農産物輸入は、総体として量的拡大が鈍化するなかで品目によっては大きく増加しているものもあり、こうした動向は、国民の食生活が量的にはほぼ満足し得る水準に達したなかで、我が国の食料消費が多様化していることを反映したものとみられる。

＜農産物輸入をめぐる問題＞

前述したように、我が国の農産物輸入は経済の高度成長とそれに伴う食料需要の増大や需要構造の変化に対応して大幅に増加し、農産物の純輸入額は55年には3兆円を越え、農業総産出額に対する割合も約3割に達している。この水準はEC諸国と比べてもかなり高く、カロリー自給率も低下している。

この結果、我が国の食料供給の海外依存は大幅に強まっている。世界の農産物貿易に占めるシェアも58年で小麦6%、飼料穀物19%、大豆19%等と高いものになっており、我が国はソ連と並ぶ世界の農産物輸入大国となっている。

一方、我が国農業においては、大幅な自給率の低下、多くの農産物についての厳しい生産調整の実施等多数の問題点をかかえており、また、48年以降農産物輸入は、食料消費の伸びの鈍化に伴い、その伸びが鈍化している。

こうした状況のなかで、近年、世界経済の低迷、我が国の貿易黒字幅の拡大等を背景に諸外国との貿易摩擦問題が厳しさを増しており、農産物についてもその市場開放が強く要請されるようになっている。

農産物輸入数量指数(増減率)

(単位:%)

	農産物 総合	穀物	果実	野菜	砂糖類	植物油 原料脂	畜産品	蚕糸
		その調整品	その調整品	その調整品				
30~40年(年率)	9.9	6.2	31.5	8.6	7.0	8.6	14.9	16.9
40~48 (//)	10.2	6.7	15.6	11.4	3.3	9.9	15.2	37.1
48~54 (//)	2.3	4.5	4.3	8.6	▲ 0.3	1.7	1.8	▲ 8.5
54~59 (//)	1.9	1.8	2.6	8.0	▲ 5.6	1.7	2.2	▲ 10.8
54年	8.5	6.1	3.5	10.7	13.7	3.1	8.3	▲ 26.4
55	▲ 3.8	▲ 1.1	▲ 2.1	7.1	▲ 12.7	4.1	▲ 9.2	▲ 34.8
56	1.8	0.5	3.8	14.5	▲ 27.8	▲ 1.6	17.6	▲ 41.0
57	2.7	0.4	2.1	▲ 9.3	34.5	1.3	▲ 6.7	78.5
58	4.2	2.8	0.2	9.8	▲ 13.0	12.0	5.3	▲ 0.1
59	4.9	6.8	9.4	20.2	1.5	▲ 6.6	▲ 6.4	▲ 17.6

◆お詫び◆

9月号青木宏史様の所属名が誤っておりましたので
右の通り訂正してお詫び申し上げます。

千葉県農業試験場北総営農技術指導所
砂地野菜研究室長 青木宏史

キュウリの台木としての アレチウリの特性 (2)

千葉県農業試験場
野菜研究室長

土岐知久

3. キュウリの作型別の栽培特性

アレチウリはキュウリの台木として親和性の高いことが明らかになった。一方アレチウリそのものはフサリュウム菌やネコブ線虫などの土壌病害虫に抵抗性であり、しかも低温伸長性が高く、吸肥力も強いことから、台木として年間を通じ各作型に利用できるものと考え、作型別の栽培特性をその作型の慣行台木と比較して検討した。

促成栽培は11月1日に王金促成をまき、1月下旬から5月中旬まで収穫した。半促成栽培は1月10日にときわ光3号Pをまき、3月下旬から5月下旬まで収穫した。夏栽培は5月20日に神緑2号をまき、7月上旬から8月中旬まで収穫した。抑制栽培は8月5日に夏秋節成2号をまき、9月下旬から11月中旬まで収穫した。越冬栽培は9月1日に王金越冬をまき、10月下旬から1月下旬まで収穫した。トンネル栽培は3月18日にときわ光3号Pをまき、5月下旬から7月中旬まで収穫した。

促成栽培では、1作目のアレチウリの生育は過繁茂になり初期収量が低下したが、2作目から温度管理の適正化(2℃程度低下させる)によって、草丈は大差なかつ

たが、節間長が短くなったため、節数は8%多くなり葉長は35%、側枝数は50%多くなり、収量も初期は12%、全期は18%の増加となった。半促成栽培では1、2作ともほぼ同傾向を示し、アレチウリの生育は、草丈と葉数が3~5%、葉長と側枝数が20%程度多くなるにとどまったが、収量は初期から15%の増加となった。夏栽培の1作目はアレチウリの草丈がやや低く、葉長が10%多かったが、他は大差なく、収量は20%増加となった。2作目の生育はほぼ同等であったが、収量は20%増加となった。抑制栽培の1作目は、アレチウリの生育が育苗中から明らかに劣り、定植後もその傾向を維持し、収量は全期では大差ないものの、初期では10%少なかった。2作目もアレチウリは育苗中から劣ったが、定植後は大差なく、収量も初期では同等、全期では8%の増加となった。越冬栽培では1、2作ともほぼ同傾向を示し、アレチウリの生育は葉長・側枝数などややまさり、収量は16%の増加となった。トンネル栽培では2作目のアレチウリには、1作目に見られたつる枯病はみられず、生育はやや劣るものの収量では大差なかった。

以上の結果から低温期を経過する作型ではアレチウリの生育促進効果は顕著であるが、高温期を経過する作型ではその効果が低下するところから、短日植物であるアレチウリはその生態的特性から耐寒性は高いが耐暑性はやや劣るものと思われた。しかしいずれの作型でも収量はまさるか、同程度であるところからアレチウリは台木としてカボチャに代り得るものであり、周年栽培も可能と思われた。